

初期救世軍軍歌と日本製 Tune の登場 —『キリスト教の文化と近代日本キリスト教 音楽文化をめぐって』—

山本 美紀

I. はじめに

昨年来、石井十次と岡山孤児院音楽幻燈隊についての研究を行い、岡山孤児院の音楽隊がこれまで救世軍の音楽活動に影響を受けたと理解されてきたが、実際には石井十次が当時の市井の音楽状況を反映したものであったことを明らかにしてきた。

岡山孤児院音楽隊が救世軍の影響を受けたという根拠は、もっぱら山室軍平の石井十次追悼にあたっての以下の文章によっていた。

「石井君も此の書物〔ブース『最暗黒の英国とその出路』〕により啓発せられた処が大分あつたものらしい。- 中略 - 孤児院に楽隊を設けたなども、この書に学んだことであつたと承知している。」¹

ちなみに、この記述は石井の死後 20 周年（1934 年）に出版された『石井十次伝』に寄せられたもので、同種の内容が山室軍平『私の青年時代』にもあ

¹山室軍平「石井十次君とわたし」『石井十次伝』所有【420 - 444】石井記念協会、1987（復刻）、428 頁。

るが² (山室 1929, 93)、そこには「楽隊を設けた」くだりは入っていない。

そもそも、最も初期の形である風琴音楽隊が結成されたのは、1893年M26年11月であるが、日本の救世軍宣教が開始(開戦)されるのは、ライト大佐率いる1895(M28)年の横浜上陸以来であり、さらに日本救世軍軍楽隊が結成されるのは1902(M35)年で、岡山孤児院音楽隊よりもずっと後である³

実際、岡山孤児院の音楽幻燈隊の目録にあるレパートリーは、完全に娯楽的内容であり、それを見ると、本格的な音楽隊として「ブラスバンド化」されていく初期段階において、岡山孤児院音楽隊は聖歌や讃美歌といった曲よりも、通俗曲を自らのレパートリーとし、居留地などでのバンドの存在を踏襲していったことがわかる。その変化は、「東洋救世軍音楽隊」と自称していたころの路傍伝道の「注意喚起(客寄せ)」的な音楽利用から、式典などで使われるいわゆる「バンド」的な、「余興の音楽」へと音楽的内容の変化と共にシフトしていったのでありと考えられる。

上記の点については、すでに拙著「岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教Band文化の萌芽をめぐって」⁴に詳述したので、そちらに譲る。本論では、これらの研究過程において確認された、ごく初期の日本救世軍軍歌における日本製Tuneについて、主として山室軍平『平民之福音』との関わりを考慮しつつ、検討したい。

讃美歌の、中でもTune(チューン;旋律)に注目するにあたって、ことばで紡がれた『平民之福音』を参照するのは、山室が平民(大衆)への明確な福音伝道の意思を持って讃美歌を使用したこととの共通理念が確認されると考えるからである。これまで、山室軍平だけでなく、石井十次や賀川豊彦

²山室軍平『私の青年時代』救世軍出版及供給部、1929年、93頁。

³「軍楽隊の編成：此度救世軍に於て軍楽隊が編成され、幻燈を携へて東海道筋より中国。四国に押し出だすと云うに付いては、私共は是亦神の軍隊の日本に於る進歩の一会談として之を祝ふ者である。」(「軍楽隊の編成」『関の声』M35年2月1日)

⁴山本美紀「岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教Band文化の萌芽をめぐって」京都大学大学院文学研究科キリスト教学専修現代キリスト教思想研究会(アジアと宗教的多元性研究会)『アジア・キリスト教・多元性』2015年、101-125頁。

も、近代日本のキリスト教を背景に持つ先駆的な社会事業家としての功績を残し、その研究が進んできた。山室軍平率いる救世軍の場合は、廃娯運動や禁酒運動などが有名だろう。しかしそのような彼らの運動の原動力となったのは、それぞれのキリスト教信仰であり、その信仰の現れが行動となり、具体的な実を近代に残してきたのである。ともすれば、その具体的で社会における実利的な「実」の研究で、すべての理解を得たとされがちな近代日本のキリスト教の大衆との接点を、ここでは讃美歌や書籍に焦点を当てることで、キリスト教の福音伝道として今一度とらえなおすことを目的とする。

II. 山室軍平と救世軍の出会い

今でこそ、日本救世軍のファウンダーの一人として有名な山室軍平であるが、救世軍との出会いを用意したのは、岡山県と同志社に連なる者というつながりを持つ石井十次であった。

『わたしの青春時代』によると、山室軍平は岡山県阿哲群（現在の新見市）に生まれ、後に養家を家出。上京し、築地活版製造所に小僧として働いていた 1887；M20 年の晩秋にキリスト教の路傍伝道に偶然出会ったのがきっかけで、教会に通い始めたという。1888；M21 年にメソジスト派の流れをくむ築地福音教会で受洗し、その後「一般平民の救いのために」⁵ 献身した。そのような山室の「キリストの福音を一般民衆の間に宣伝したいと言って、しきりに苦心している様子」に感動した築地教会員の一人が援助を申し入れ、山室は福音教会の伝道学校に通学し、初めてキリスト教伝道者としての訓練を受けることになる。後に所属することになる救世軍はメソジスト派を源流としているから、結局彼は組合教会系の同志社を經由して古巣に戻ったとも言えよう。

日頃から文書伝道に強い関心を持っていた山室は、当時「国民の友」編集者として知られていた徳富蘇峯（猪一郎）を、自身の教会の青年会が主催す

⁵山室軍平『私の青年時代』救世軍出版及供給部、1929年、36頁。

る講演会に、講演者として招くことを思いつく。蘇峯から「真の品行を有する人物」として新島襄のことを聞き、「格別に現在の日本に、新島襄氏のような生きた人格者がおられることを知って、もはや矢もたてもたまらなくなり、どんなにしてもその人のもとに行き、その高貴な品行の感化を受けずにはいられない」⁶と、京都行きを切望するようになる。時を同じくして、銀座で医療活動を行っていたサマリタン会に出入りするようになり、そこで偶然ジョージ・ミュラーについて書かれた『信仰の生涯』を手にする。

ミュラーは人も知るように英国のブリストル市に大きな孤児院を経営していた大慈善家で、その特色とするところは、彼が年中、数千人の孤児を救護しているにもかかわらず、その大事業にたいして、だれにもかつて金銭上の援助を求めず、ただもっぱら神にいのっている神はその都度必ず入用なものを豊かに与えて、助けたもうというのにある。- 中略 - 彼が京都の同志社で、「神とともに歩む」、「われらに信仰を増したまえ」という二回の説教をしたのを筆記し、それに彼の小伝と新島襄氏の序文を添えて出版したのが、この「信仰の生涯」（定価金二十銭）と題する小冊子であった。⁷

話聞いた新島襄の姿に感動し、さらにジョージ・ミュラーの生き方に感激した山室は「私の旨のうちにはいつしか『ミュラーを助ける神は、またわたくしを助ける神だ。わたくしはこのミュラーの神に頼って大胆に京都に行こう』と決意を新たにした。

何とか京都行きの工面をして、1889； M22年に同志社で開催された第一回夏期学校に参加し、念願の新島襄を実際に目にする。その際、同志社普通学校に通う吉田清太郎、佐々倉代七郎と知り合い、彼らが岡山県高梁町に夏期伝道に行くのに同行することとなった。その夏期伝道が終わって帰る途中に、岡山孤児院に立ち寄り、初めて石井十次と出会う。

当時は岡山孤児院の創立からまだようやく一、二年を経たばかりで、

⁶同前、40-41 頁。

⁷同前、42-43 頁。

児童の数は三十人に足らず、門田屋敷の三友寺というお寺の一部を借りて、彼らの収容していたのである。 - 中略 - 以来、わたくしどもは互いに相知り相信じる友人として、同君が世を去られる日まで、変らない交わりを結んだのである。⁸

もともとジョージ・ミュラーに感動し、祈りをもって不可能と思われていた京都行きを実現させた経緯をもつ山室にとって、石井は日本でジョージ・ミュラーを実践する「生き証人」としても映ったに違いない。

その石井十次が、山室と救世軍との出会いのきっかけとなった。

〔1892;M25年〕石井十次君は痔の手術を受くために、上京して同志社病院に入院せられた。 - 中略 - 其の少し前に石井君の友人某氏〔青木要吉〕が米国から救世軍の創立者、大将ウィリアム・ブース著『最暗黒の英国及びその出路』という一書を贈り、『此は目下欧米諸国で大層評判の高い書物であるから、一部贈呈する』というて来た。そこで君は其書物を携えて入院し、同志社の学生にて英語に堪能なる山本徳尚君といふ人に頼んで、毎日之を其の枕許で訳読してもらい、私は又毎日出かけて行つて、其聞書を作ることとなった。⁹

このようにして書物を通して救世軍を知ってから3年後、石井の要請により初めて日本に上陸した救世軍宣教師ライト大佐を訪ねることになったのである。

石井君が言うには、「このごろ英国から救世軍の一隊が日本に渡来し、すでに第一回の集会を東京の青年会館で営んだ様子で、それに対する新聞雑誌の批評はまちまちである。自分は上京して救世軍を訪れたいと思い、すでにバックストン氏からその司令官宛の紹介状さえもらっているが、 - 中略 - どうにもするすにすることができない。 - 中略

⁸同前、47-48頁。

⁹同前、122-123頁。

- どうか一つその救世軍をたずね、君の分とわたしの分と二人分見て、様子を知らせてもらいたいものである」とのことで、- 中略 - バックストーン氏が石井君を救世軍司令官ライト大佐に紹介する手紙をもらい受け、- 中略 - 京橋区新富町に救世軍日本本営を訪問することとなったのである。¹⁰

救世軍が日本に宣教を開始したのは 1895；M28 年 9 月のことであった。男女 12 人の救世軍士官が派遣されて横浜で伝道を開始したとされるが、山室の文章の中では「男女十四名の救世軍士官」となっている。10 月の中旬に、山室は当時京橋区新富町にあった救世軍本営を訪ね、その日にライト大佐から救世軍入りを勧められる。しかし、山室の救世軍士官に対する第一印象は、あまり良いものでは無かったようだ。

司令官ライト大佐は非常に気さくな性質で、少しも小さな事に拘泥しない人であったから、その時もひとりでビスケットをかじりながら、無造作にわたくしに向かって、『君に勧める。君は救世軍に入りたまえ』などと言われる。その態度がいかに高慢であるようにわたくしには感じられて、はなはだ不愉快に思った。¹¹

帰ろうとした時に書記長官派得る中佐からブース著『軍令及び軍律、兵士の巻』を手渡され、彼は、そこに日頃から物足りなく思っていた、日本においてキリスト教徒として生きるための指針を見たのである。

わたくしはこれまで日本のキリスト教が、とかく空理空論に流れて、わたくしどもの日常生活をどんなに営むかというような実際問題を閑却しているのを遺憾に思い、- 中略 - わたくしどもがいかに神を喜ばせ、また世を救うために生きねばならないかというような、宗教方面の教訓は全然ないわけではないが、あまり多くは教えていないことをうらんでいた。ところが、『軍令及び軍律、兵士の巻』は、わたく

¹⁰同前、110 頁。

¹¹同前、112 頁。

しが平生物足りなく思っていたそれらすべての欠陥を、全部満たして
くれたのである。¹²

さらに毎夜開かれる救世軍の集会を「見物」するうち、福音伝道のために日
本人に同化しようと苦心し、苦勞しながら伝道活動を行う救世軍に傾倒して
いくようになる。

わたくしは四十日ほどの間、昼は大工のまねごとをしながら、夜に
なると出て行って救世軍を見学した。 - 中略 - 〔救世軍は〕毎夜のよ
うに集会を営んでいたから、わたくしはせっせとそれを見物に出かけ
た。何しろ、外国士官たちが日本に同化したいつもりからとはいえ、
ぶかっこうな日本服を着て、日本のげたをはいてそこらを歩き、家
中では不体裁な坐りかたをした上に、足が痛くなると人前もはばから
ず長長とそれを伸ばすなど、だらしないことおびたたく、外観は
いかにも奇妙不思議なものであったが、それにもかかわらず、わたく
しは彼らの中に何物か案外尊敬に値するものがあればこそ、『キリス
トのために愚となって』こっけいも演ずれば、思い切った動作もでき
るのであろうというように、むしろ一切の事をきわめて善意に解釈し
ていた - 中略 - ¹³ (傍点筆者)

山室が『私の青年時代』に生き生きと描く、救世軍との出会いの様子はそ
のまま、当時の平民（一般大衆）日本人と救世軍の出会いの場面であると思
えられ、彼らの間に横たわる溝と、それを何とか埋めようとしている外国人
宣教師の苦心の様子を示していると言えよう。

そもそも、当時の日本のキリスト教は、大衆に対しどのような態度を示し
ていたのであろうか。山室軍平と禁酒運動について論じた葛西は、「彼〔山室〕
は当時の（クリスチャンも含めた）宗教家が、貧しい都市労働者に冷たいこ

¹²同前、123 頁。

¹³同前、112-113 頁。

とに敏感であった。」¹⁴とする。

山室自身、それまで出会ったキリスト者のコミュニティーに必ずしも常に無条件で受け入れられてきたわけではなかった。山室が最初に築地教会に行き始めたとき、洗礼を希望してもなかなか許可が下りなかったエピソードも、その1つだろう。山室自身は後に、教会のそのような態度に理解を示しつつ、受洗の重要性を説きながら、志願しても入会させてくれないことに悩みの日々を過ごしたことを記している。当時のキリスト教信仰者の集まりが、誰からの紹介も無い、身なりの貧しい新参者にどのように向き合っていたかを、雄弁に語る事例であろう。

だんだん集会に出席するうち、牧師からクリスチャンとなるには、洗礼を受けることが大切だという話を聞き、『それでは一つ、わたくしにもその洗礼をお願い申したい』と願い出ておいたのに、どういふものなのか、教会では他の人々に洗礼を受けるついではあっても、私には受けろと言ってくれない。そんなに洗礼が大切だと教えながら、授けてくれないものとしたらどうすべきかと、わたくしはその事についてしきりに思い惑ったのであった。 - 中略 -

後日になって考えてみると、そのころわたくしは金があったら書物を買うばかりで、なりふりに少しも気をつけなかったから、晴れ着にも仕事着にも、いつもただ一枚、巡査の振るの小倉服を着用しており、それに活版製造部であるから、鉛や油がそこらについている。しかも靴という物はかつて買ったことがないから、たいていいつでもなぎなたの竹の皮ぞうりか何か履いており - 中略 - 奇妙な青年がたまたま教会にやって来て、洗礼志願をしたからといって、えたいが知れないから、教会でも急に言うところを採り上げ兼ねたのもあながち無理ではなかったであろう。その点について、わたくしはただ教会の当事者だけがとがめるつもりはないのである。¹⁵

¹⁴ 葛西賢太「救世軍の山室軍平と禁酒運動—自助努力、社会事業、宗教的救済のはざままで」『駒澤大学心理学論集』第10号【79-87】、2008年、85頁。

¹⁵ 山室軍平、前掲書31-32頁。

ほとんどツテもなく上京し、活版小僧としてなんとか日々を暮らす山室は、まさに都会の片隅の「労働者」であり、「平民」であった。築地教会での出来事に限らず、救世軍に出会うまでに山室が出会った人で、山室と同じ目線に立って話をするキリスト者はどれほどいたのだろうか。

そのような背景が、山室のライト大佐のあっさりした態度を「高慢に」思えたという第一印象にも影響を与えていると考えられる。そして、夜ごとに行われる野外伝道を実際に見、彼らとよく知り合ううちに、ライト大佐の態度がぞんざいさからではなく、キリストの福音を伝えるために「『キリストのために愚となって』こっけいも演ずれば、思い切った動作もできる」からだとして受け止めるようになっていった。

このような、最初は外国人宣教師である士官を「高慢」に思い、その後着物の所作に苦勞する彼らを「だらしなく」思い、最後には「一切の事をきわめて善意に解釈」するようになった山室の心の変化は、当時の一般大衆がキリスト教を受け止める経過をコンパクトに表しているのではないだろうか。築地福音教会で新参者だった際には、他でもない見栄えて疑われた山室本人が、である。

さて、そのような過程を経て、山室軍平は 1895 ; M28 年、23 歳の時に「わたくしが多年、それと知らずにさがしていた命の捨て所」として、救世軍士官となった。日頃から、当時のキリスト教信仰に物足りなさを感じ、救世軍の信仰にキリスト者の具体的な生き方を見いだしたが故の決意であった。

Ⅲ. 山室軍平の大衆へのまなざしー『平民之福音』

もともと、彼が「神と平民とのため」に自分自身を献げようとするようになったのは、印刷所の同僚をキリスト教の集会に誘った際に「終日激しい労働をした上に、だれがわざわざあんな肩のこるような話など、聞きに出かける物好きがあるか」と言われ、確かに「講壇のことばも、話も、また一切

の態度も、大分一般民衆とかけ離れたところがあるように思われた」¹⁶ からである。

つまりキリスト教の講壇と一般大衆との間に、渡ることのできない隔たりがあるのではないかと感じられた。キリスト教の出版物についても、またわたくしは大体これと同じようなことを経験したのである。つまり、時々キリスト教のトラクトなど手に入れて、職工諸君の間に配ってみたが、これもまた多くは「読んでもわからない」と言って、そこらに打ち捨てられるのであった。¹⁷

彼が言う「一般平民」とは、職工だけでなく、労働者、無学な人も無知な人も、という意味を含んでいる¹⁸。キリスト教の講壇と一般大衆との間に横たわる隔たりを埋めるために、彼は思案の結果、「昔の心学本、道話本、その他詩だの、歌だの、俳句だの、ことわざだの、譬え話だの、というようなものを、出来るだけ広く集め - 中略 - そばからそれらをキリスト教の宣伝に取り入れて用いるように努めた」という¹⁹。

そのころの努力の成果が、『平民之福音』に遺憾なく発揮されていると言えよう。

1. 構成

<写真1>は、1899；M32年10月19日に発行された『平民之福音』初版である。最後の頁からは、英語の表紙が始まっており、“COMMON PEOPLE’ S GOSPEL By ENSIGN GUNPEI YAMAMURO”とあり、初版から山室軍兵の名前が著者として表に出たものとなっている。

編集発行人は山室軍平、印刷人は村岡平吉、発行所は救世軍、販売が警醒社と教文館が担当している。扉には「模範的労働者耶穌」というタイトルを付けられた、大工として働くイエスの絵が印刷されている(<写真2>参照)。

¹⁶同前、35頁。

¹⁷同前。

¹⁸同前、36頁。

¹⁹同前。

ここからすでに、イエス・キリストを「神の子」として、人間から遠く離れた存在として描くのではなく、この本を手取るであろう人々と同じ「労働者」であり、身近な存在として描こう、福音を伝えようとする意図がはっきりと見てとれる。

『平民之福音』には、当時の日本本営大佐ルーベン・ペリー、著者山室軍平らによる2つの序文が寄せられている。ペリーの序文は、推薦文の意味合いの強いものであるが、本書が十分に山室以下日本人救世軍士官（伝道師）達の日常の思いをふまえたものであることを語っている。また、救世軍の信仰については、キリスト教の新しい教えではなく、あくまでもその伝統の中で「自然に成長したるものである」とする。そして、本書は救世軍が日本に開戦した当初から最も困難に思った経験から生まれたものだとする。

士官達が経験上最も困難に感じたることは、何うも此大なる神様の救の方法目的をば、わかる様に求道者、改心者に知らすことの仲々容易でないと云ふ一事であつた。而して聖書の翻訳者が用ふて居る文字や、又は基督教に関係ある神学上の言語など云ふものも、又好加減に刻苦勉強した上でなくては、然う然う誰にでも鳥渡読んで、すぐ其意味が分かること云ふわけには参り兼ねます。然り乍ら救世軍はれ互が毎日話合ふて居る様な、極々通俗な語で神様の御慈愛を、罪人に知らすことを其主義とする。²⁰

昔イエス自身が人々の間に住み、働き、人々もまたイエスの語る話を聞くのを楽しみに聞いたということによって、かえって攻撃を受けたという譬えをあげて、「然んな世間の攻撃は今日の我輩急性軍人が最も飲んで之を受ける所である」²¹とする。

一方、山室軍平の「自序」は、「余は一個の労働者であります。」という宣

²⁰山室軍平『平民之福音』救世軍、1899年、2-3頁。

²¹同前、序文5頁。

言から始まる。自分が築地の活版製造所の職工であった時代に救われたこと、そして「唯今迄、余の小さな胸の中にある、唯一つの願望は、如何にもして此大なる神様の御慈愛を、殊に我が敬愛する平民諸君に、お知らせ申したいと云ふことでござりました。」²²と語りかける。

『平民の福音』は、5章から成り、「第1章 天の父様(ちちさま)」「第2章 人の罪惡(つみとが)」「第3章 基督の救い」「第4章 信仰の生涯」「第5章 職分の道」となっている。まず神がどのような方であり(第1章)、キリスト教の罪や咎(悪)とされることは何か(第2章)を解説した後で、罪咎(悪)からのキリストの救いが述べられ(第3章)、救われた人間の生き方がどのようなものであるか(第4章)が語られ、最後に「職分」という、日常生活の具体的な内容に踏み込み、示唆を与える構成がとらえられている。観念的になりがちなキリスト教の神理解と罪、救済の概念を身近な事柄に置き換え解説することから出発し、そこから個々の人間にとっての信仰生活の具体的営みへと入っていく過程はわかりやすく、キリスト教と信仰生活のHow To本とも言える。「日本のキリスト教が、とかく空理空論に流れて、わたくしどもの日常生活をどんなに営むかというような實際問題を閑却しているのを遺憾」に思う²³、山室の問題意識が確認される部分である。

2. 内容と特徴

何よりも、『平民之福音』の特殊性を示すのは、従来のキリスト教の理解から切り離されたと言ってもよい、聖書の話の自由な置き換えであり、譬えである。例えば、第1章3節にある「元始に神天地を造り給へり」では、目に見えざる創造者なる神は、空き巢泥棒に「肉」を盗まれた人がどのようにして犯人を特定したか、という譬え話で示される。

そこで近所の人々が打寄つて「何うしてお前さんは、見もしないで

然なに明かに盗賊の様子が分かりましたかと、尋ねますると土人は答へ

²²同前、自序1頁。

て、「何あに梁の肉を下ろす為に、踏台を用ふた跡があるから、盜賊は背の低かつた者と判断をし、表の砂の上の、足跡の狭いのを見て年寄と思ひ、其外踏なので西洋人（白人）と分り、壁に筒口を、寄せかけたがらしい損所があるので、鉄砲を持つて居たことを知り、- 中略 - 丁度此土人が、眼に盜賊を見ないでも其の場の様子で其盜賊の、人品、風躰、所持品から、其伴れて居たる狛のこと迄言ひ当てた様に、私し共は亦此両の眼で、真の神様を見ることは出来ないけれども、そのお造りなされたる天地万物の、広大なることを見ては、真の神様の広大無辺なることを知り、- 以下略²⁴

自然の中に神の存在を観ること、また神の時が「盗人のようにやってくる」ことは確かに聖書の中にも出てくる（マタイ 24:43）。しかし、空き巣に入った泥棒の人物特定といった推理小説を借りてきたような体裁、また眼に見えない神を（証拠を残しすぎる少々間の抜けた）空き巣に例えることは、確かに大衆には受けただろうが、当時の日本のキリスト教社会にどのように映ったのかは疑問である。

さらに、以下の文章などは、釈迦や孔子など、日本人になじみ深い信仰対象とイエス・キリストとを並べて描くことで、キリスト教の説く愛と既存の宗教との違いをわかりやすく説明しようとしたものと考えられる。同時に、象徴的な3人の登場人物を立て、最後に話の柱となる際立たせたい人物を置くといった話の組み立てが、「善きサマリア人の譬え話」を下敷きにしていて考えて差し支えないだろう。

私は浮き世の旅路に彷徨ふて、計らずも罪惡と、難苦の深い井に陥り、苦み悶へて居た者であります。- 中略 - 『助けて呉れ、助けて呉れ、助けて呉れ』と呼はつて居ると、丁度通り合せたのがお釈迦様で、上か

²³注 10 参照。

²⁴山室軍平『平民之福音』救世軍、1899年、21頁。

ら鳥渡井を窺いて、『コリヤコリヤお前は可愛相だがな、何分前世の因果で然云うふ身の上になつたのだから、致しかたがない、よくよく其処の道理をかみ分けて、諦めて往生したが可いぞと、可様に申残して立去られました。- 中略 - 今度お出になつたのが孔子様でさります。同じく井を窺いて、『コリヤコリヤ、人間といふものはな、浮々して居ると、何時でも然ういふ処へはまるものじや。お前も屹度今後を戒めて、一度はまつた井へ、二度落ちる様ことがあつてはならぬぞと、かように教へて置て立去られました。かかる所へ駆付けて来たのが、主耶蘇基督であります。長い梯を井へ降し、丸裸になつて自分から水の底迄下りて来て、疲れ果てたる私しを引起し、後から推すやら、前へ廻つて引張るやら、色々にして到頭私しを井から救ひ上げ、葉を服ませ、傷を裏み、行届いたる介抱をなし、頓て元気の快復したる処を見計らいひ、私しの既往の不心得を説示し、尚も行先々の注意を授けて、新たに幸福なる天国の旅路を、お初めさせなされた -以下略²⁵

聖書の譬え話を、日本人にわかりやすく伝えようとするあまり、聖書の譬え話が本来持っている重点がそれてしまっている部分もある。今回は詳述できないが、例えば「放蕩息子の譬え話」などは、その典型である。

〔放蕩息子が〕ここに初めて気のついたのは、自分が今日迄の親不孝、恩不知の罪と、其道楽不品行の咎であります。- 中略 - せめてもの罪滅しに、乞食になつてなりとも、我生れ故郷に帰り、- 中略 - 不心得なる道楽息子も死ぬる前には、自分の悪いことを悟り、後悔しても死ますと、云ふだけなりと云ふて死ぬるが優しであろうと-以下略²⁶

このように親不孝を悔いるくだりがあるが、聖書の中では「親不孝を悔いる」から帰ろうというのではなく、生活の困窮の中で「我に返る」というところ（罪の自覚）から、父（神）の深く限りない愛が示される。「後悔して死

²⁵同前、83-84 頁。

²⁶同前、56 頁。

にまする」というのは、聖書の教えにはなく、このように「死ぬ」などと軽く出てくるあたりは、当時の浄瑠璃の世話物などの影響が確認できるものであろう。

本書を読んでいて印象的なのは、聖書の言葉が単に書き連ねられているわけではないことである。古今東西の様々な逸話や偉人・有名人のエピソード、日本の習慣、つい最近の事件などの雑多な話題と、聖書の言葉が対等に並んでいることである。さらに、キリスト教の教えに日本の習慣が近づけられているのではなく、キリスト教の教えが当時の日本の信心をはじめとした日常生活に近寄せられて語られていることは、特筆に値する。

本書の持つこのような特性は、先述したように、山室軍平が「神と平民とのために尽くす」べく思い悩みながら「昔の心学本、道話本、その他詩だの、歌だの、俳句だの、ことわざだの、たとえ話だの」というようなものを、できるだけ広く集めて熟読し、あるものは書き抜いて精読し、また暗記して、そばからそれらをキリスト教の宣伝にとり入れるように努めた²⁷ということが、まさに生かされた結果であろう。その結果、救世軍外国人宣教師ペリーが「互が毎日話合ふて居る様な、極々通俗な語」²⁸と表するものとなったとも言える。同時にそこにこそ、日本人である山室軍平が彼ならではの伝道の視点を持ち、「平民」をどのような対象ととらえて伝道していこうとしたのか、その徹底した伝道観が確認できるのである。

IV. 初期救世軍軍歌集と日本製 Tune

『平民之福音』の山室軍平「自序」にも、歌の1節が引かれている²⁹ように、彼にとって聖歌を含めたあらゆる歌は身近なものであったと考えられる

²⁷注 17 参照。

²⁸注 20 参照。

²⁹「呼べさませ眠る靈魂 告げ示せ主の救、悔改めずば滅ぶ世を、見るに忍びんや」同前、自序 1-2 頁。

が、自身が得意としているものではなかったようである。実際、『わたしの青春時代』では、単独で1ヶ月間路傍伝道をした際には、「元来歌がへたで、讃美歌を多く知らないから、大概毎晩『たてよ、いざたて』と、『かりいなる日こそこめ』と、二つの歌のどちらかを始めに歌えば、今一つの方を終わりに歌うことにして、ともかく三十晩の集会を続けた」³⁰と回顧しているほどである。

チューン Tune とは旋律名のことであり、歌詞の韻律と対応して自由に差替が可能になっている讃美歌特有のシステムの要素である。Tune 名は、その旋律の生まれた地名や、由来などにちなんで付けられており、説教者はその時の会衆やメッセージ内容によって旋律の差替ができ、様々な意味を付随させることも可能であった。このような歌詞と旋律との掛け合わせは、元来英語圏の讃美歌に特有のものであるが、かつて日本でも讃美歌が文語体であったときには、その習慣が踏襲されていた。日本語の讃美歌集の後にある Tune Index も、ある程度はそのために存在したものだだろう。現代では、歌詞が会衆にわかりやすい表現に変換されるにつれて口語体になり、楽譜付きの讃美歌集の普及によって、歌詞に1つの旋律が固定されてきたことで、皮肉なことに韻律の表現を考慮して Tune を入れ替えて使う文化は日本語讃美歌集では消えつつある。しかし、今でも救世軍軍歌の中には Tune 文化の名残があり、実際筆者は同じ歌詞で、同じ韻をふみながら全く違った旋律が当てられることで、大きく印象が変わる讃美歌の様子に驚いた。同時に、日本語による讃美歌の中に、豊かに Tune 文化が展開していた時代があったことを改めて知ったのである。そして、その Tune 文化は、ウェスレーがメソジスト派の讃美に流行歌を取り入れたように、日本においても当時の流行歌を積極的に取り入れたものであった³¹。

現在、山室軍平記念救世軍資料館では、エドワード・ライト (Edward Wright 1861-1947, 在日本 1895-99) の下で編纂された最初の『救世軍軍歌』集 (1896 ; M29 年, 以下『救世軍軍歌 M29』) <写真 3>と、ヘンリー・ホ

³⁰ 山室軍平『私の青年時代』救世軍出版及供給部、1929年、45頁。

³¹ 山本美紀『メソジストの音楽』ヨベル、2012年、46-55頁。

ッダー (1861?-1962, 在日本 1908-1914) 編集『救世軍軍歌』集第 5 版 (1909; M42 年、以下『救世軍軍歌 M42』) <写真 4>が保管されている。

このうち、『救世軍軍歌 M29』には、日本救世軍オリジナルの軍歌や Tune は載っておらず、それが確認されるのは、『救世軍軍歌 M42』の方である。もっとも、ホッダーの在日期間と、ホッダーが編集とされる『救世軍軍歌 M42』の初版年代は 1901; M34 年であり、そうなるとホッダーの着任以前に初版が出ていたことになる。そのため、初版である 1901; M34 年の編集者は別であった可能性もあり、さらにその初版から軍歌集に日本救世軍オリジナル軍歌が載っていたとも考えられる。しかし、現段階に至るまで、ホッダー編の初版の存在は確認されていないので不明である。

なお、ホッダーは日本救世軍に派遣された 4 代目の宣教師である。

1. エドワード・ライト、山室軍平編『救世軍軍歌』集 (『救世軍軍歌 M29』)

奥付には、明治 29 年 10 月 19 日、同年 10 月 23 日に発行、編集兼発行人は山室軍平、印刷人は小方仙之助、印刷所は青山学院実業部とある。収録された讃美歌は 73 編、それに続いて、頌歌 (頌栄) 2 編に、現在のコーラス (応答唱/現行の讃美歌の場合はリフレイン部分) にあたる諧歌 (つれぶし) が 37 編収録されている。目次や序言 (序文)、奥付きを除いたページ数は、全 88 頁である。

序文には、歌詞の掲載を許された謝辞が並んでおり、それぞれの転載元は以下のようにになっている。

<表 1: 『救世軍軍歌 M29』軍歌番号と転載元>

転載元	救世軍軍歌番号
教文館	1, 3, 5, 6, 7, 15, 17, 24, 25, 35, 38, 47, 48, 49, 51, 52, 56, 57, 59, 63, 64, 68
新撰讃美	16, 18, 20, 23, 27, 36, 53, 54, 58, 67, 69

歌	
バック スト ン	2, 9, 19

上記に含まれていない内容は、英国救世軍で歌われていた讃美歌を日本語訳したものと考えられる。なお、これらの歌がすべて救世軍オリジナルの歌詞なのか、あるいはメソジスト派の讃美歌であるのかは、未確認である。先にも少し触れたが、救世軍はメソジスト派の牧師であったウィリアム・ブースによって始められた経緯があり、救世軍の讃美歌にはメソジスト派の讃美がかなり多く用いられている。

目次は、歌詞の歌い出しを「いろは」順に並べてあり、それに番号が付いている。歌われている内容についての分類などはない。各讃美歌のタイトルには英語タイトルも付けてあることから、外国人救世軍士官が歌詞内容について参照できる配慮もあったと考えられる。

2. ヘンリー・ホッダー編『救世軍軍歌』(1909;M42)における日本製 Tune

奥書には、明治34年11月28日印刷、11月30日初版発行、編集兼発行人にはヘンリー・ホッダー、印刷人はデー・エス・スペンサー、発行所が救世軍本営、印刷所は教文館印刷所となっており、山室軍平の名前は記載されていない。先述したように、本論で参照したのは、初版ではなく、救世軍資料館に保管されていた1909;M42年版なので、初版は別の奥付になっている可能性もある。

収録された讃美歌は93編、諧歌が85編収録されており、諧歌の中に頌歌が含まれている。目次と奥付を除いたページ数は、全114頁である。

前救世軍歌集と本集と比べてまず目に付くのは、以下の点である。

- 1) 序言がなくなっている。
- 2) 目次頁が11頁あり、軍歌と諧歌に分けて目次がある。
- 3) 目次覧が、軍歌・諧歌ともに「救の部」「実験の部」など項目ごとに分類されている。

- 4) 『救世軍軍歌 M29』では最終曲となっていた《救世軍の歌》が、掲載されていない。(『救世軍軍歌 M42』では、67 番に《救世軍マーチ March on Salvation Army) のみ)
- 5) 英文タイトルとともに、いくつかの曲に Tune 名が記載されるようになっていてる。
- 6) Tune の中に、日本名を持つ Tune が登場するようになっていてる。

などである。

以下に、救世軍軍歌の分類と、それぞれの項目に入れられた軍歌の数を示す。

<表 2 : 『救世軍軍歌 M42』項目別 曲数>

軍歌		つれぶし	
分類項目	数	分類項目	数
救の部	21	救の部	22
実験の部	18	実験の部	28
聖潔の部	20	聖潔の部	17
戦争の部	14	戦争の部	13
天国の部	9	雑の部	5
少年軍の部	5		
雑の部	6		

この中で、日本救世軍オリジナル軍歌と日本の流行歌を取り入れたと考えられる Tune は以下のものである。

<表 3 : 『救世軍軍歌 M42』収録日本名 Tune>

番号	Tune 名	歌詞英語タイトル	歌い出し	分類
18	かぞえうた Kazoouta	Repent and Come to Jesus	いとよき まことのかみ に	救ひの部
19	そもそも	Jesus Will Save You	そもそもわれ	救ひの部

	Somosomo	Now	ら人間は	
20	三千余万 Sanzen yoman	Come and Be Cleansed from Sin	つみあるもの よ	救ひの部
21	勇敢なる水 兵 Yukan naru suihei	On the Cross of Calvary	そらかきくも り地は震ひ	救ひの部
37	うめがえ Umegae	The Salvation of Jesus	もろびとの つみのため	実験の部
38	桜井の駅 Sakurai no yeki	An Every day Salvation	昔主イエスは 草深き	実験の部
39	垂死の喇叭 卒 Suishi no rappasotsu	The Joy of Salvation	あな有りがた き恵かな	実験の部
71	こんろんさ んと Konronsanto (コンロン 山頭?)	To Save The Dying World	いばらのかむ り なんのそ の	戦争の部
72	雪の進軍 Yuki no Shingun	David and Goliath	かみのいくさ を	戦争の部
73	鉄道唱歌 Tetsudo shoka	Fight and Pray	すすめものど も	戦争の部
82	今様 Imayo	Rise My saul and Stretch Thy Wings	わがたましひ よ 羽をあげ て	天国の部
86	汽車 Kisha	Junior Soldier' s Pledge	題「少年兵の約 束」	少年軍の 部

87	かぞえうた Kazoeuta	The Ten Commandments	題「十戒の歌」 歌い出し；一つ とや ひとり のほかにか みはなし	少年軍の 部
89	かぞえうた Kazoeuta	Christmas Song	題「クリスマスの歌」 歌い出し；一つ とや ひとび といわへ か みのこが	雑の部
91	とりのはやし し Tori no Hayashi (鶏の林?)	Articles of War	題「軍中の約束」	雑の部

上記 Tune の出典元ジャンルとして、軍歌は 20, 21, 38, 39, 71, 72, 91 番、唱歌は 38, 73, (82) 番、俗謡は 18, 19, 82, 87, 89 番と考えられる。19 番については、付いている Tune 名からは推測不明ではあるが、明治中期に「兵隊節」というものがあり、それを借用した可能性がある。《かぞえうた》は、歌い出しからもわかるように、明治初期から複数の歌詞や旋律が存在する、庶民に親しまれた歌い方である。37 番《うめがえ》は、おそらく《梅ヶ枝節》を指すと考えられる。もともと歌詞は浄瑠璃によるとされるが、旋律は俗謡《かんかんのう》から来ているという。「かんかんのう（看々踊り）」は、明清楽の《九連環》に由来する。

また、91 番《とりのはやし》（軍歌集では Torinohayashi）とあるのは、おそらく『大捷軍歌第一篇』（1894;M27）に収録された《豊島（ほうとう）の戦》（詞；池辺善象，曲；納所弁次郎）の旋律を指すと考えられる。『大捷

軍歌第一篇』には、他にも《勇敢なる水兵》（詞；佐々木信綱，曲；奥好襄）が収録されていた。ちなみに《勇敢なる水兵》は、ウィリアム・ブースの来日（1907;M40年）の際、歓迎の歌に採用された Tune でもある。

3. 日本製 Tune に見る、岡山孤児院音楽幻燈隊との関連性と大衆曲

ここまで見てきて気がつくのが、岡山孤児院音楽幻燈隊との興味深い関係性である。岡山孤児院音楽幻燈隊の本格的な活動が始まった際、石井十次にとって音楽幻燈隊の活動は伝道と運営資金の調達、両方を兼ね備えたものと考えられており、矛盾するものではなかった。「至るところの市町村に於て音楽的集会を開き孤児院のために義損金品を募集し且つ主の福音を宣伝せん又た可ならずや」³² と至って当然のものであった。もっとも、海外からの宣教師にはそのように受け止められていたわけではなく、松江バンドのバックストーンが1898;M31年6月に松江に訪れた石井に苦言を呈したことは、拙論でも触れた通りである³³。

これまで岡山孤児院音楽幻燈隊の音楽的内容を扱った研究がそれほどなかったため、石井の言説である「義捐金集め」「福音伝道」であることが、ごく自然に受け止められてきた。しかし、冒頭にも述べたように、岡山孤児院音楽幻燈隊のレパートリーは、実際には娯楽性の強い「余興の音楽」であった（〈資料1〉参照）。

〈資料1〉岡山孤児院慈善音楽幻燈会目録（『日誌 明治三十一年』）³⁴

³² 岡山孤児院『石井十次日誌（明治二十九年）』12月3日付日記、1967年、392頁。

³³ 山本美紀「岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって」京都大学大学院文学研究科キリスト教学専修現代キリスト教思想研究会（アジアと宗教的多元性研究会）『アジア・キリスト教・多元性』2015年、21頁。

³⁴ *1898M31年の石井十次日誌に記された「岡山孤児院慈善音楽幻燈会目録」より（『日誌明治三十一年』233頁）。これにより、四国遠征（1898（M31）年2月5日～）をこなしたと考えられる。

初期救世軍軍歌と日本製 Tune の登場
 -『キリスト教文化と近代日本キリスト教
 音楽文化をめぐって』-

●和曲の部	君か代	愛国	越後獅子	春雨
	深ひ深ひ	琉球マーチ	九連環	十日エビス
	お江戸日本橋	浮世節	かんかんの 一	
●軍歌の部	コンロン山頭	敵は幾万	威海衛	軍艦
	垂死の喇叭卒	雪の進軍	平壤の大捷	豊島海戦
	勇敢なる水兵			
●洋曲の部	アンダンテ ワルス	ポルカ (おどりの曲)		
	ホワイトローズ、ワルス、マスユツト、 カドリー (おどりの曲)			
	アクトンソ イツクステ ツプ	ヴクトリー マーチ	ウエルベルチルプ	
	ジョーシア ンマーチ (舞踊付)	プロシアン マーチ		
●風琴の部	せとのだん だんばたけ	松づくし	越後獅子	春雨
	洋曲数曲			
●壮士歌及壮士踊数番				
●剣舞数番				
●幻燈の部	景色数 十枚			
	孤兒院写真 数十枚			

この<資料 1>は、音楽幻燈隊の大々的なツアーが始まったころ
 (1898;M31 年) のレポーターであり、石井十次の日誌に記された「岡山

孤児院慈善音楽幻燈会目録」³⁵から作成したものである。これを見ると、先ほど確認した『救世軍軍歌集 M42』の日本名の付いた Tune と、岡山孤児院音楽幻燈隊のレパートリーとが、特に軍歌を中心に重なっていることがわかる。

ここから、初期救世軍軍歌集において日本製 Tune として採用された Tune について、以下の特徴が確認できる。

- 1) 一般大衆に身近な、娯楽性の強い通俗曲であるということ。
- 2) すでに、音楽隊（楽隊）のレパートリーとして、大衆に受け入れられていた作品であること。

IV. おわりに ーキリスト教と大衆文化、キリスト教器楽音楽文化の関連性

日本救世軍軍楽隊は岡山孤児院音楽幻燈隊よりも後であり、影響を与えたわけではないことは先述したとおりである。前章でみた 1) 2) が示していることもまた、救世軍がすでに日本の庶民文化の中で、流行歌として、また楽隊の演奏として受け入れられている作品を、軍歌集の中に入れたということがうかがえる。これは、救世軍の特徴でもあるバンド（軍楽隊）のレパートリーに、ごく初期から日本の Tune も含まれていた可能性を示すものである。

採用された日本製 Tune が、救世軍バンドが結成された 1902 ; M35 年には巷で流行っていた流行歌であり、岡山孤児院音楽幻燈隊が演奏していたとすれば、すでに楽譜があったと考えるのが自然だからだ。だとすれば、ホッダー編『救世軍軍歌 M42』の初版とされている 1901 ; M34 年の段階から、すでに軍歌集に日本救世軍オリジナル Tune が載っていた可能性は強まるだろう。

II の『平民之福音』でも確認したように、山室の伝道姿勢は、キリスト教の教えに日本の習慣を近づけようとするのではなく、キリスト教の教えを当時の日本人の信心をはじめとした日常生活や、それを基盤に生じる思いに近

³⁵岡山孤児院『石井十次日誌（明治三十一年）』1969年、233頁。

寄せて語ろうとするものであった。学校で習う唱歌も、立派な揃いのユニフォームを着て演奏する「楽隊」も、大衆にとっては依然として物珍しい、見世物的要素の強いものであったとも考えられる。

救世軍と言えば、「制服」が信仰の証としての機能を持つことも特徴的である。しかし、ごく初期の軍楽隊の写真を見れば、同時期の岡山孤児院音楽幻燈隊と対照的なことに気づかされる。〈写真 5〉は、救世軍軍楽隊が始まった当初のものである。宣教師はじめ全員が着物姿である一方、下の岡山孤児院音楽隊の方は、パリッとした制服姿である（〈写真 6〉）。これは、石井十次の孤児院の子どもたちへの配慮とこだわりによるものであったと言われるが、世間一般の大衆に対して、どのように自らを見せようとしたのか、象徴的に示していると言えるだろう。

今回は、救世軍の初期軍歌における日本の Tune について、『平民之福音』での山室の方法を踏まえて考察した。しかし、今回はそれぞれの Tune が「流行歌」であったことを確認しただけであり、その Tune が本来持っていた旋律の内容（多くは、もともと付いていた歌詞によるが）や性質とどの程度関わるものであるのかについては今後の研究課題である。さらにも、これらの Tune が韻を合わせて用いられただけでなく、Tune そのものが持つ背景が生かされたことがあったのかについて焦点を当てた研究を進めたいと考えている。讃美歌はまさに、言葉と音楽（旋律）の組み合わせが意味をなす、記号的要素を持つ。それが、『平民之福音』をはじめとして、近代初期に実験された日本既存の道德観や倫理観とキリスト教との接続と、どのように補完し合うのか明らかにしたい。おそらくそこに、現代にも続く、キリスト教の日本との向き合い方の一面が確認できると思うからだ。

<引用・参考文献>

石井十次研究会『写真・映像で綴る岡山孤児院 ー石井十次と岡山孤児院の

『児童養護実践一』2006年。

岡山孤児院『石井十次日誌（明治二十九年）』、1967年。

『石井十次日誌（明治三十一年）』1969年。

葛西賢太「救世軍の山室軍平と禁酒運動―自助努力、社会事業、宗教的救済のはざままで」『駒澤大学心理学論集』第10号【79-87】、2008年。

ホッダー・ヘンリー Henry Hodder 編『救世軍軍歌』（第5版）、救世軍、1909年。

救世軍 「軍楽隊の編成」『関の声』1902；M35年2月1日号。

山室軍平『救世軍軍歌』（エドワード・ライト；救世軍）、1896年。

『平民之福音』救世軍、1899年。

『私の青年時代』救世軍出版及供給部、1929年。

「石井十次君とわたし」『石井十次伝』【420 - 444】石井記念協会、1987（復刻）428頁。

山本美紀『メソジストの音楽』ヨベル、2012年。

「岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって」京都大学大学院文学研究科キリスト教学専修現代キリスト教思想研究会（アジアと宗教的多元性研究会）『アジア・キリスト教・多元性』【101-125】、2015年。

<資料提供>

謝辞：以下の資料館より、写真資料の掲載いただきました。

社会福祉法人 石井記念友愛社 石井十次資料館

山室軍平記念救世軍資料館

初期救世軍軍歌と日本製 Tune の登場
 -『キリスト教文化と近代日本キリスト教
 音楽文化をめぐって』-

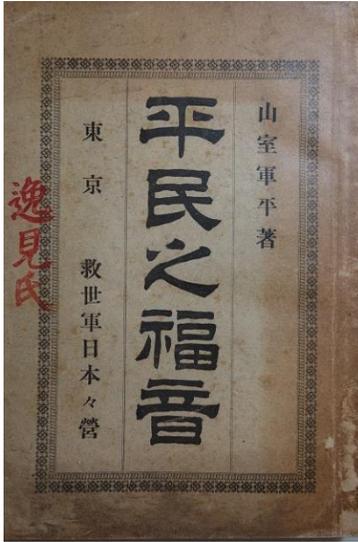


写真 1 : 山室軍平『平民之福音』
 初版表紙
 山室軍平記念救世軍資料館蔵



写真 2 : 山室軍平『平民之福音』
 扉挿絵「模範的労働者耶穌」
 山室軍平記念救世軍資料館蔵



写真 3 : エドワード・ライト『救世
 軍軍歌』集 (1896 ; M29年)
 山室軍平記念救世軍資料館蔵



写真 4 : ヘンリー・ホッダー『救世
 軍軍歌』集第 5 版 (1909 ; M42)
 山室軍平記念救世軍資料館蔵



写真 5：1902 M35 年 救世軍幻燈軍楽隊
山室軍平記念救世軍資料館蔵



写真 6：1900 年：M33 (新報 33 号：7 月 10 日発行)：青年音楽隊 解散時(?)
石井十次研究会『写真・映像で綴る岡山孤児院』より転載

(奈良学園大学人間教育学部 准教授)